



福島原子力事故関連情報アーカイブ

Fukushima Nuclear Accident Archive

Title	低線量放射線の健康影響に関する研究の現状と今後 -日本放射線安全管理学会-
Alternative_Title	Present status and future of the studies on the health effects of low dose radiation: in Japanese Society of Radiation Safety Management
Author(s)	松田 尚樹(長崎大学) Matsuda, Naoki(Nagasaki Univ.)
Citation	第 53 回アイソトープ・放射線研究発表会要旨集, p.163 53rd Annual Meeting on Radioisotope and Radiation Researches
Subject	セッション：パネル討論 1(1)
Text Version	Publisher
URL	http://f-archive.jaea.go.jp/dspace/handle/faa/106853
Right	© 2016 Author
Notes	禁無断転載 All rights reserved. 「第 53 回アイソトープ・放射線研究発表会要旨集」のデータであり、発表内容に変更がある場合があります。



低線量放射線の健康影響に関する研究の現状と今後—日本放射線安全管理学会—
Present status and future of the studies on the health effects of low dose radiation:
in Japanese Society of Radiation Safety Management

長崎大学原爆後障害医療研究所*¹

松田尚樹*¹
(MATSUDA Naoki)

放射線安全管理の現場を科学する学問領域の形成を目指す日本放射線安全管理学会にとって、低線量放射線影響研究は常に情報をアップデートしておくべき領域の一つであるが、放射線生物学を専門とする会員は少なく、またその成果を学術大会で発表することは極めて稀である。したがって、低線量放射線影響については他の学会から教えていただく立場にある。ただ学会誌における放射線の健康影響に関する報告のインパクトは高く、J-STAGE における 2014 年 1 月から 2015 年 10 月の邦文記事アクセス数の 1 位は松原純子氏の「放射線の人体影響の現実と生体防御機構を直視する」で 4681 回、3 位に山内基弘氏らの「放射線被ばく後にできる DNA 損傷に対するヒト細胞の防御機構」で 807 回。いずれも教育的な総説である。

教えていただく立場となると、知識が得られれば良いので、ついつい偉い先生の話に鵜呑みにしがちである。一つの話を知ると、一義的にそれが真実と信じきってしまう。生物屋としては、生物現象はなにごとにも疑うところから始まるが、なかなかそうはいかない。そこで全国の放射線の管理の現場を支える「放射線の専門家」を対象にして、「安全と考える年間線量」を指標にした調査を行ったところ、自分に対しては平均で 35mSv、ものみごとに 20mSv と 50mSv の中間に来た。いかに実験科学的、疫学的知見ではなく、規制科学的数値が健康影響を判断するアンカーになっているかがわかる。これではいけないと放射線管理担当者向けの放射線の健康リスクに関するテキストを作成しようとした矢先に東京電力福島第一発電所事故が起こった。その後の健康リスクに関する混乱に、専門家の意見の不一致が寄与しているところ大であったことは否めない。規制科学を超えたところで思考停止してしまった専門家も少なくはないはずだ。その姿は、一般市民の描く、誰でも均質な「放射線の専門家」とは異なるものであったろう。

福島原発事故後の本学会は、アドホック委員会を即時に立ち上げ、良質なモニタリングとコミュニケーションをキーワードに活動を展開した。直後の 6 月のシンポジウムに始まり、2012 年からは郡山市で 2 度にわたり市民参加のシンポジウムと勉強会を開催した。社会と学会の接点が一気に拡大したが、特に将来の健康リスクに不安を抱く住民に対して、コンセンサスの十分得られた生物学的知見をもとに学会として対処できたかという点は課題を感じている。少なくとも私自身も、放射線影響学会の緊急対応グループが、発がんリスクが不確実になるレベルとして 100mSv を語り始めるまで、自分でこの数値を口に出すことはなかった。

安全文化という言葉はよく聞くが、そもそも日本には安全文化以前に、放射線の科学が文化にいたっていないように思う。安全神話とまでは言わないが、安全だ、安全に、ということを経験しすぎてきたせいで、どのように社会的な、外的な要因が変化したとしても揺らぐことのない、ロバスト性の高い放射線科学文化が育っていない。その基本となる徹底的な現場主義と、最新主義を貫くためには、学会の枠組みを超えた放射線科学研究が欠かせない。低線量放射線健康影響が、主要なキーワードの一つであることは間違いない。学会としてそこに十分に与するだけの専門性は持ち合わせていないが、放射線安全管理担当者や放射線利用者への情報ゲートウェイとしての機能は十分に果たしていきたい。

*¹ Atomic Bomb Disease Institute, Nagasaki University